

キャリアデザイン学における質的調査法の研究動向

TANAKA, Kennosuke / 田中, 研之輔

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン : 法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

2010-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007570>

キャリアデザイン学における質的調査法の研究動向

法政大学キャリアデザイン学部専任講師 田中研之輔

1. 問題の所在——「方法」で縫合する

社会構造の歴史的な大転換期を迎えた今日、「働いていくこと」や「生きていくこと」の不安が過剰なまでに語られる。超少子高齢化社会が抱える幾多の問題やグローバルな環境リスク問題といった社会問題等と比較すると、歴史的にみて戦後高度経済成長を経て「豊かな社会」へと劇的に飛躍してきたこの国において、幸いにしてこれまでそれほど問題と認識されてこなかった、失業・貧困・格差といった労働をとりまく問題群が中心的な社会的関心事項へと競り出してきている。グローバル金融危機以降に深刻化した「派遣切り」、大量失業、失業率の悪化、野宿生活者やネットカフェ滞留者などは、労働をめぐる問題が人々の働く権利にとどまらず、生きていくこと、社会に存することの生存する権利をめぐる問題と隣接していることをわれわれに再認識させることになった。こうした急激なまでの社会変化は、「個の時代」から「個を蝕む時代」（田中、2009）への歴史的転換として捉えることができる。

「個を蝕む時代」において、社会に存在する個々人がいかにして働いていくのか、生きていくのかに人々の関心が集まることは、至極当然の社会的帰結である。このような社会変化において、様々な学問的蓄積から働くことをめぐる問題や生きることをめぐる問題を探求し、何らかのヴィジョンを提示していく実践的な学問であるキャリアデザイン学に関する社会的要請も以前にもまして高ま

りをみせている。

だが、働くことをめぐる問題も生きることをめぐる問題もそれぞれに多様で複雑、かつ重層化した諸問題の混合体から形成されており、一つの専門的な学問的見識から分析を加えていくことは可能であっても、隣接他領域の蓄積を縫合した上で働くことと生きることの全体的な問題にキャリアデザイン学ならではの体系的な分析を呈示できているとは言い難い。そもそも、隣接他領域の学問蓄積を縫合し総合的かつ実践的な分析などは不可能であるのだという結論を出すには早急すぎる。けれども、複合的な問題への実践的なアプローチの方向性と何よりもそうした蓄積への社会的な要請が増しているなかで、何らかの道標が示されなければならない。この道標を示す上で有効だと考えるのが、隣接他領域の学問蓄積を、内在的な専門知ではなくて、アプローチの技法、言い換えるなら、「方法」でもって縫合していく試みである。

ひとまず、キャリアデザイン学萌芽期（2003年から2010年現在）のこれまでの研究蓄積を振り返るなら、他の専門学問の蓄積と同じように、①資料調査（文献）、②量的調査（統計）、③質的調査（インタビュー、フィールドワーク）、④複合型メソッド（資料調査+量的調査、量的調査+質的調査、資料調査+質的調査等）の4つの方法のいずれかでもって検討が加えられてきていることがわかる。この点で、方法論的観点からみていくことは、キャリアデザイン学の新規性に惑わさ

れることなく、既存の学問蓄積との対話の扉を開いておくという点でも意義がある。

本稿は、こうした問題意識のもとに、キャリアデザイン学萌芽期に呈示されてきた蓄積のなかでも、とくに、インタビューやフィールドワークといった質的調査をアプローチの「方法」に据えた研究群を整理していく。そうすることで、研究素材が異なり、専門的な見識の異なる蓄積を「アプローチの技法＝方法」¹で縫合し、キャリアデザイン学としての今後の方向性を示していくことにしたい。

2. キャリアデザイン学における質的調査の学問特性

キャリアデザイン学の質的調査に先行する蓄積は、1) 方法論的萌芽期(人類学・民俗学的フィールドワーク)、2) 方法論的確立期(都市社会学的フィールドワーク)、3) 方法論的発展期(文化研究・社会学・人類学・教育学、経営学等、隣接領域横断的質的調査法)、4) 方法論的専門分化期(インタビュー法の専門分化化、フィールドワーク法の構築・再構築)に整理して理解できよう。キャリアデザイン学における質的調査の蓄積は、これら4段階の方法論的発展を経て、萌芽期を迎えたといえる。

1) の方法論的萌芽期を代表する人類学的な質的調査は、物理的な距離もあり、かつ、文化的な形態も異なる〈他者〉を対象化し、それらの蓄積をもとにした。2) の方法論的確立期の初期シカゴ学派都市社会学者たちは、物理的にも隣接し、文化的に同様の形態を共有する人々を対象化してきた。しかし、その対象はギャング集団、売春婦、ドラッグユーザー、野宿者、季節労働者など、社会の周縁に位置付けられる、言わば、〈内なる他者〉の社会的・生活世界を対象化してきた。続く、3) の方法論的発展期や、4) 方法論的専門分化期の質的調査では、学校や職場、地域に属する集団や個人、〈身近な他者〉を対象化してきた。

それでは、ここでキャリアデザイン学の質的調査の成果として学会誌等に記載されたものの、方法・対象・調査期間をまとめてみよう²

キャリアデザイン学における質的調査法は、表1にもあるように、①インタビュー法、②フィールドワーク法、③複合型メソッド、④体験・教育プログラムの4つの方法に分類できる³。インタビュー法は、1) ヒアリング法(電話やメール等による質的な聞きとり)、2) キャリア・インタビュー、3) キャリア・ヒストリー(オーラル・キャリアヒストリー)、4) ライフ・ヒストリー、5) 会話分析・エスノメソドロロジー、5) グラウンディッド・セオリーの5つの方向から構成される⁴。フィールドワーク法は、1) 参与観察、2) 観察参与、3) インテンシブ観察参与、4) 参与的客観化、5) 集合・協働型参与観察の5つから構成される⁵。インタビュー法とフィールドワーク法以外には、一つに、複合型メソッド、もう一つに、体験・教育プログラムがある。

表1をもとに質的調査の方法論的発展に確認できた隣接学問領域の学問特性と比較すると、キャリアデザイン学における質的調査の学問特性とは、自らが属する集団や「自己の経路」など、言わば、〈内なる自己〉を対象化してきている傾向があることが指摘できる。言い換えるなら、従来、質的調査法が対象としてきた〈他者〉と比べて、キャリアデザイン学における質的調査とは、「身近な対象」を研究対象とする実践的なアプローチの技法であるということである。

その点で、「当事者性」もほかの学問蓄積における質的調査以上に必然的に高い傾向がある。調査者が調査対象者への一方的なインタビューを行うのでもなく、また、専門分化以降に認識されるようになった「相互行為としてのインタビュー」のその先にある、相互行為を通じた臨床的な助言やコンサルティング的な助言が求められるのもキャリアデザイン学の特性でもあり、学問的使命であるともいえよう。「調査」ではなく「臨床」や「介入」といった実践性の過程の記述をいかに分析していくか、また、その前段階として「語ら

表1：キャリアデザイン学における質的調査法の研究蓄積

質的調査法	方法	対象・調査期間	参考・関連文献
インタビュー	ヒアリング	個人・数時間	石田 (2006.CD.vol.2) 仕事の共通性について
	キャリア・インタビュー	個人・数時間	福本 (2008.CD.vol.4) …技術系社員 5名へのヒアリング 藤原 (2009.CD.vol.5) …ゲーム産業プロデューサー 14名へのインタビュー 森永 (2009.CD.vol.5) …他業種組織人 33名へのインタビュー
		個人・数時間	小玉 (2004. LC.vol.1)*1 ・女性事務職の事例分析
	キャリア・ヒストリー	個人・数時間	梅崎 (2004.LC.vol.1) ・日本生産性本部元職員へのインタビュー
	ライフ・ヒストリー	個人・数時間	田中 (2006) ・材木屋の半世紀の語り
	会話分析・エスノメソドロジー	個人・数時間	*2
	グラウンデッド・セオリー	個人・数か月	高橋 (2009.CD.vol.5) …航空機客室乗務員 12名の事例分析
フィールドワーク	参与観察	集団・数か月～約一年間	西尾 (2007.CD.vol.3) …サービス・プロフェッショナル (芸舞妓) の参与観察 小笠原 (1998) …女性
	観察参与	集団・複数年	*2
	インテンシブ観察参与	集団・複数年	田中 (2009) …対個人サービス産業従事者の労働現場
	参与的客観化	個人・複数年	*2
	集合・協働型参与観察	地域・複数年	神楽坂オーラルヒストリー・アーカイブプロジェクト TTC制作・「Tokyography」
複合型メソッド	インタビュー＋自由記述質問紙法 or 質問紙法	個人＋集団・数時間	坂井 (2006) …有職者 3名の転職理由に関する個別面接 明石 (2009.CD.vol.5) …他業種組織人 18名への半構造化したインタビュー 石田 (2009) …産業保健師のキャリア形成調査の二次分析、産業保健師管理職女性 10名へのヒアリング調査
体験・教育プログラム	集合・協働型体験学習	個人＋集団・複数年	高井・高木 (2007.CD.vol.3) …教員養成サポートプログラムの事例分析 澤田 (2008.CD.vol.4) …大学におけるキャリア教育 江口 (2009.CD.vol.5) …プロジェクト型サークル活動 福本 (2009.CD.vol.5) …キャリア教育実践

(2009.12. 田中作成)

*1: LC・・・『生涯学習とキャリアデザイン』（法政大学キャリアデザイン学会紀要）

*2: 表1 空欄箇所は、現段階で未蓄積。

れる素データ」をいかに分析していくかが重要なポイントであることは疑いない。身近な対象を対象化する上で、調査地へのアクセスシビリティは

確保され、調査時の使用言語の負担が軽い傾向がある。すでに働いている職場の仲間を対象化するなどの場合には、調査者対象者との「ラポール形

成(信頼関係)」を改めて構築する必要もない。

けれども、「身近な対象」であるからといって対象化しやすいというわけではない。むしろ、「身近であればあるほど、対象化しにくい」という困難性を抱えた学問特性をもつこともここで確認しておかねばならないだろう。つまり、人類学と社会学の間に位置するようなフィールドワークを実践してきているサトルズが「ある程度の距離を保つことができ、アイロニーや新鮮な驚きが維持できるフィールド。自分の所属集団について、自分が一番よく知っていると思うのなら、他の集団を対象にするのがいい」(サトルズ,2000,p38)と述べていることを理解した上で、それでもなお、「よく知っている個人・集団」を対象化していくことにキャリアデザイン学の質的調査法の方法論的特性と意義があるといえよう。

3. 「身近な対象」を対象化する技法・認識論—キャリアヒストリー法における個人・軌道・社会

身近な対象への分析と実践的な介入は、研究する自身の視点を対象へとそのまま持ち込む危険性と絶えず隣り合わせである⁶。学問特性からして他学問と比較しても、「身近な対象」を研究対象に据え、実学志向の強いキャリアデザイン学を「似非科学」に失墜させないためにも次のような「身近な対象を客観化する主体を客観化する」次の二つの認識論的な理解が不可欠である。

まず第一に、「共通感覚(常識)」を科学的分析上、断絶し、「もつとも根深くもつとも意識されない固執や同意を断ち切ること」(ブルデュー、2007、311)が要求される。研究者も社会的存在であるがゆえに、社会的規範や「社会的諸構造を内面化しており」(ブルデュー、2007、291)、「自らの主題のもとに提起する問題を、研究対象である当の社会的世界から受け取ってしまう危険性にさらされている」(ブルデュー、2007、292)。こうした危険性を回避するためには、「いずれの場合も自明であるとされているものを明示化するこ

とが目的であり、対象についても、また、主体の対象に対する関係についても」(ブルデュー、2007、100)客観的な分析を加えていくことが必要となる。

そして第二に、「研究対象を対象化しようとする動機」を分析することである⁷。というのも、水島がブルデューの方法論的立脚点についての的確にまとめているように「「汝を知れ」とか「自己の探求」という言葉に表される月並みな動機ではなく、相手を対象化しようとする動機、それ自体が当人に自覚されない限り、人は相手について語っているつもりでつねに自分について、あるいは、その相手と自分との関係について語ってしまう。」(ブルデュー、2007、338)からである。そこで、「対象に自己を投影しないためには、自己を対象化し、対象と自己との関係を対象化するしか道はない」(水島和則、2007、338)。

これらの前提をもとにより具体的な地平へと議論を展開していくことにする。そこで「働いていくこと」や「生きていくこと」にアプローチするのに有益な方法として取り入れられ、蓄積が積み上げられてきている「キャリアヒストリー法」の認識論的前提について本節では考察を加えていくことにしたい。キャリアヒストリー法とは、質的調査法の中でもとくに、インタビュー法をもとに、人々の個人史を「働くこと」に重点を置きながら聴き取りをすすめる、労働と生活の経路や転機を抽出するのに適した方法である。というのも、「人がある状況のなかで、ある態度をもち、ある行為をするというのは、その状況の中でその人がもっている対人関係のネットワーク(網の目のようなつながり)と関連していること、また、その人自身が、そのときまでに体験した人生の脈絡の中で、その人の中に積み重ねられてきた経過が、そのとき、その状況の中での判断や動機を作り出す」(中野、2003、16-17)ものだからである。

その認識論的前提についてブルデューが生活史の認識論的前提について述べた内容を踏まえて次のようにまとめることができるだろう。

「キャリアヒストリーを語るというのは、

①キャリアを一つの歴史であること、また、
 ②一つのキャリアは一つの歴史であり、この歴史の物語とみなされた1人の個人的存在の出来事全体と一体であること。そして、③キャリアを、数々の交差点をもった道、道路、経歴として描くこと（悪徳と美徳のあいだのヘラクレス）、あるいは道のりとして、つまり軌道、コース、過程、通り道、旅、行路、一方向の直線的移動（「運動」）として描くこと、そうすることで、④開始点（「人生の始まり」）、諸段階、二重の意味での終わり＝目的、すなわち終点と始点⁸あるいは歴史（物語）の目的＝終わりをもたらすことを前提とすることである⁹。

だが、それゆえに「キャリアヒストリーを構成すること、一つの歴史としてキャリアを扱うこと、つまり、キャリアをある一まとまりの話として、またさまざまな出来事に方向性を与える話として、さらに首尾一貫した話として扱うことは、キャリアについて共有される表象やレトリカルな「幻想」へと身を捧げること」（ブルデュー、2007、104）でもあることにわれわれは自覚的でなければならない。つまり、キャリアヒストリーとは、「現実なるものが不連続（バラバラ）なものであり、理由もなく並存している諸要素によって形成され、その一つ一つの要素はただ一つのものであり、こうした諸要素は予想を越えて、言葉もなしに、偶発的な仕方で絶えず出現するだけに、つかみがない」（ブルデュー、2007、104）という在り様とは全く別の方向でもって、一貫性と恣意性ゆえに成立する「人為的構成物」（ブルデュー、2007、110）であるということである。

ブルデュー自身も、「生活史」という完全無欠な人為的構成物をつくる際に、研究者が知らないうちに作動させてしまう、分析されない、コントロール不能な社会的過程を批判的に分析することは、それ自体が目的ではない」（ブルデュー、2007、110）と述べているように、本論においても、「人為的構成物」としてのキャリアヒストリーの集積

にただ批判的な見解を述べるのではなく、より生産的な可能性を見出していくことにしたい¹⁰。

その際に、キャリアヒストリーにおける個人史的・（あるいは、ときに社会史的な）「転機」は、「社会的空間における配置と移動」（ブルデュー、2007、110）として理解されなければならない¹¹。それゆえに、「一つの地位から他の地位に至る運動の方向＝意味は、明らかに方向づけられた空間におけるこれらの地位のもつ、ある時点での意味どうしの客観的な関係において決定されるのであり」（ブルデュー、2007、111）、「同じ界に参加している、あるいは対立している他の行為者全体と、ある行為者を関係づける客観的關係全体を構築してはじめて」（ブルデュー、2007、111）、その軌道、言い換えるなら、キャリアヒストリーは理解されるのである。

4. 結論：キャリアデザイン学における質的調査法の認識論的前提

キャリアデザイン学とは、冒頭で述べた社会の不透明性に対抗する実践的な手段の呈示を求める社会的要請への応答であるとともに、そもそもが自己への問題関心に対して科学的な見地から対応していくという意味でもなんらかの打開策の呈示が求められるという点で、その実践性を棚上げすることはできない¹²。

本稿の問題意識は、経営学、経済学、教育学、社会学、心理学、政治学、文化研究といった隣接他領域の蓄積を土台に「働くこと」と「生きていくこと」をめぐる実践的な学問としてのキャリアデザイン学を「方法」で整理する作業を試みた。とくに、本稿では、質的調査法の蓄積を整理することでキャリアデザイン学が、「身近な対象」を対象化するがゆえに実践性と、身近であるがゆえの困難性、を抱えていることを指摘した。とくに、「身近であるがゆえの困難」とは、研究対象と分析が、研究者自身の「共通感覚＝常識」に大きく影響を受けるということである。

産業構造の変化や、新自由主義体制の浸透と深

化、ならびに、グローバル金融危機以降の市場経済の低迷を理由に、今後、単線的で安定的なキャリアを全うする者が少数化する社会が姿を見せ始めている。それゆえに、複線的で不安定な社会的環境の中での様々な「職業や人生に関わる判断・選択」におけるときに、一つの物語を構成しえない現実に即した生き様も抽出しながら、より理論的・経験的、そして、実践的なキャリアデザイン学の蓄積を残していくことが求められているといえよう。

むしろ、近年の社会調査法の方向性にもみられるように、キャリアデザイン学においても、本稿で取り上げた質的調査法と統計などを分析の中枢に据えた量的調査法は、二項対立的に存在するものではなく、相補完的な関係性にある。キャリアデザイン学の萌芽期から確立期にむけて、第一に「方法」で隣接他領域の学問蓄積を縫合し、第二に、質的調査・量的調査ともに、「身近な対象」を対象化するために認識論的な前提を整理し共有すること、そしてこの先に、質的調査・量的調査を架橋する総合的で実践的なアプローチを集合的・協働的に行っていくことが求められている。

— 注 —

- 1) ここでアプローチの技法としている方法とは、素材の発見、抽出、加工、のすべての過程をつなぐ支柱のようなものとして理解しておくのがいいだろう。
- 2) 表1は、2009年12月現在のものであり、キャリアデザイン学萌芽期の質的調査を網羅しているというわけでもない。また、今後さらに様々な対象や切り口で質的な調査が展開されていくことは疑いのないことである。
- 3) 本稿では、キャリアデザイン学における質的調査法の研究蓄積を整理することにとどめ、各調査方法論の方法論的特性や他の方法との差異について等の詳細な検討は稿を改める。
- 4) キャリア・ヒストリー法とライフ・ヒストリー法は、「労働」のキャリアと「生活」の経験のど

ちらに比重を置いてインタビューするかという点で便宜的に分類できよう。

- 5) キャリアデザイン学におけるフィールドワーク法の研究蓄積は、調査者が観察者の立場で調査を行う参与観察法と、調査者が調査対象の技術・技能を習得していくなど、観察より参与に重点を置き、その過程の変化も含めて分析対象に据える研究方法である観察参与法にまず分類される。さらに、筆者は観察参与法を、調査者自身のこれまでの身体資本を生かして労働現場での労働経験等を分析対象にするといったインテンシブ観察参与法と分けて捉えている。フィールドワーク法の中で、参与的客観化法は、とくに身近な対象を無自覚に対象化する傾向があるキャリアデザイン学にとっては重要な方法である。だが、参与的客観化法とは、参与観察法や観察参与法と同じく実質的なフィールドワーク法であるがそれ以上に、フィールドワーク法の認識論的枠組みに関わる方法であるといえる。詳しくは、ブルデュー (2007) を参照のこと。
- 6) ここでは、「学者のなんたるかを知らない学者は、つまり、「学者的な視点」を知らない学者は、自分の学者的な視点を [研究対象である] 行為者の頭に持ち込む恐れがあること。さらに、その研究対象に [自分の] 理解の仕方や認識様式に属するものを繰り返し入れてしまう危険性がある」(ブルデュー、2007、272-273) というブルデューの警告を念頭に置いている。
- 7) 〈調査者〉が〈不在〉の綺麗にまとまった質的調査ほど、懐疑的なまなざしでもって、再度、検討されなければならない。
- 8) 「道を開く」とは成功や立派な仕事につくことを意味する (ブルデュー、2007、101)。
- 9) この文章は、ブルデューの生活史法の認識論的前提に関するまとめからの引用文であるが、キャリアヒストリーの認識論的前提をより明確に示すために、原文 (ブルデュー、2007、101) の生活史をキャリアヒストリーに、生をキャリアに変更して引用文を作成した。

- 10)取材（インタビュー）という方法は、対象者の人間性や生きざまに迫るための良質な方法であるばかりではなく、生身の人間どうしがわたり合う「現場」の感化力を通じて、取材（インタビュー）する側の人間の力量をも鍛えあげ、磨いてくれるものなのだ（児美川,2006,158,LC.vol.3.）。
- 11)「代表性」論で論文を締めくくらない。1 人の人間を対象としたキャリアヒストリー、一つの小集団を対象にしたフィールドワーク法をもとに、「何を導きだせるのか」[発見→考察、理論→事例分析→理論]に重点がおかれなければならない。
- 12)たとえば、社会学とキャリアデザインの違いを述べるなら、キャリア設計・戦略的経路・将来的なビジョンを文字通りの意味において積極的に呈示していくことある。

引用参考文献

- 明石陽子（2009）「キャリア積極性と労働時間」『キャリアデザイン学研究』vol.5.pp.115-126
- Bourdieu, P. and Wacquant, L, Reponses. Pour une anthropologie reflexive (=2007, 水島和則訳『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待:ブルデュー、社会学を語る』藤原書店.)
- Bourdieu,P.Meditations Pascaliennes, Editions du Seuil,1997 (=2009,加藤晴久訳『パスカルの省察』藤原書店.)
- 江口彰（2009）「プロジェクト型サークル活動からコミュニケーション能力の気づきを促す」『キャリアデザイン学研究』vol.5.pp.103-114
- 藤原正（2009）「ゲーム産業におけるプロデューサーのキャリア発達」『キャリアデザイン学研究』 vol.5.pp.5-22
- 福本徹（2008）「技術系社員にとっての労働組合役員経験の意義—電気メーカー A社の事例」『キャリアデザイン学研究』vol.4.pp.95-104.
- 福本徹（2009）「雇用環境と働くルールを中心としたキャリア教育実践報告」『キャリアデザイン学研究』 vol.5.pp.191-200
- 石田克平（2006）「育児と仕事の共通性について

- 仕事か家庭かの二項対立を超えて」『キャリアデザイン学研究』 vol.2pp.46-60
- 森永雄太（2009）「仕事における動機づけの自己調整—キャリアステージ間の比較を通じて」『キャリアデザイン学研究』 vol.5.pp.23-36
- 西尾久美子（2007）「関係性を通じたキャリア形成—サービス・プロフェッショナルの事例」『キャリアデザイン学研究』 vol.3.pp.47-62
- 坂井敬子（2006）「職業確立段階の有職者を対象にした転職理由の検討—キャリアおよび生涯発達の観点から」『キャリアデザイン学研究』 vol.2 pp.18-30
- サトルズ・ジェラルド佐藤郁哉訳（2000）「好井裕明・桜井厚『フィールドワークの経験』せりか書房、27-45.
- 澤田美恵子（2008）「大学におけるキャリア教育—正統的周辺参加に基づく教育プログラムを事例として」『キャリアデザイン学研究』 vol.4.pp.5-18
- 高橋伸子（2009）「航空機客室乗務員の企業内定着に関する一考察—国内航空会社A社の事例研究—」『キャリアデザイン学研究』 vol.5.pp.65-81
- 高井俊次・高木俊雄（2007）「正統的周辺参加としてのインターンシップ—京都教員養成サポートプロジェクトを事例として」『キャリアデザイン学研究』 vol.3.pp.31-45
- 田中研之輔（2006）「佐久間ダム開発後の山村生活—ある木材業者とその家族の暮らしぶり—」町村敬志編『開発の時間開発の空間—佐久間ダムと地域社会の半世紀』東京大学出版会 p.259-282.
- 田中研之輔（2009）「再帰的創造性の生活思想」『生涯学習とキャリアデザイン vol.6』法政大学キャリアデザイン学会紀要 207-214.
- 田中研之輔（2010）「対個人サービス産業就業者の労働現場—民間スポーツ施設の専門技能若年就業者の労働実態—」『年報社会学論集』（編集中）
- 中野卓（2007）『生活史の研究』東信堂